日本書紀

廿七
廿八

太政官文庫
和書門
類八四九八
號二九
函一
架〇
冊二〇

内閣文庫
和書
類八四九八
號二
冊つ
函一三七
架五

内閣文庫
番號 和 8498
冊數 20 (18)
函號 137 45

国立公文書館
National Archives of Japan

廣辻氏藏書記

国立公文書館
National Archives of Japan

日本書紀卷第二十七

天命開別天皇　天智天皇

天命開別天皇ハ息長足日廣額天皇の太子なり母を天豊財重日足姫天皇とまうす天豊財重日足姫天皇四年より丙子天萬豊日天皇よりゆづりまして天皇のみことなり天萬豊日天皇天皇をうてひつぎ皇太子年十月よりかこあのまへつきめあらく年

内閣文庫
内閣文庫
国立公文書館
National Archives of Japan

皇祖母尊あまりひつき七日
年七月ひのとのみの日うみあり
皇太子素服して
うめそこの月穢将軍と実厥の王子
契芝加加ホと水陸ふみちりて
高麗の城下
こ長津宮うつわもまもらく
水表のいくさのまつりことをきこめも
八月前将軍大善下阿曇比羅夫連小
善下の百枝のをとこ小後将軍大善下
阿倍引田比羅夫のをとこ大山上物部の
熊大山上物部のきみおけいく君石
らをまして百濟をたすけむ
まりて兵杖五穀をおくる
式部ようく比羅夫
ま大山下狹井のもの猿掃小山下秦
のをとこ田来津をてくるとき

九月皇太子長津宮ニおはしまし徹冠
をとてくるのせもの豊璋ニさつけ給
ふまた多臣蒋敷の妹をとりてこしまめ
あるを始もちて大山下狭井のむら
檳榔小山下秦のうやつこ田来ときし
ていくさ五千あまりをひきゐて白村ニ
まもりとどこしむ豊璋国ニ入
時福信しきりに来ておもむて国のあさ
まつりごとをみ訓政
くゆるひ

て
てまつる十二月高言推十二月高麗国
さむきことはなはだしきゆゑ溟海こほりて
故りうこのいくさ雲車柳をつきて
城をこなる言麗のいくさひとをみ平
くいさみあり壮故まりうこの二
の壘をとりてくさ二の塞あるまるそれ
四夜これをとる人とりてのい
くる膝をつてなりく銑鈍ちかきき
てくめるそ脇ちくちこれをあり

きハあり

釋道顯云春秋志といふいまそ

く高麗よおこりてさるふして先

百濟よなり聲も百濟おうそとち

りよりさよりなるもよりやう

なり故しるふ

こしはるまの国司岸田臣麻呂ふ

くの佐のきを寶劍てまはりてまう

さく狹夜のこはりの人禾田の宅円

えりと佐りそ

又日本の高麗をもくふいくさのきこ

さち百濟の加巴利のをすとまりて

少をくく戻変て孔よなりてほそき紐

をとあり鳴鏑響のこもあるとのく

らく高麗百濟佐ひるほろひんとふ

ちりの

元年春正月ものとのうの刑ひのとの

みの日百濟の佐平鬼室福信よ矢十

万候絲五百斤ぬの一十斤ぬの一万端
草 ハ一千張稲種三千解を
うつの
三月かのえとのの朔うつのとのみの
日百濟王よぬの三百端ちこの
月唐人しらきの人高麗をつ高
麗ちをちひを国家ことひ
をちていくさのきみを流て
留城よりしむられをりこ

人をのみれうのさうひをえうを
めて新羅ハをのをのそこ畢ゆえ揄
を
文四月ふをみ馬の尾よるうむほ
道顕うらてまさ北の国の人南の国よ
つきなんをし高麗やまて日本
よりうんの
長五月六将軍大錦中あつこの比羅
夫のむし水師一百七十艘をひき

みて豊璋ホをくるのくるをくる
みとのりて豊璋ホをりてそのく
らいまはうむまこうねの姫と
福信よさまひてその間をかいなくく
はめてつきのどくうて時に豊
璋ホくくくくんとおうんてみとのの
うをてりくくなみをなせを
六月はちかとのひつしの刻ひのん
いぬの日百濟ちう連率万智ホとく

してみつきに物さてまくる
冬十二月ひのえいぬの朔くるの豊璋
そのまちきみ佐平福信ホと挾井のむ
らし杢市田ホ津とくるて
いつくに氏列柔いくもく田畝をく
て土地燒煩くくるくるもひのところ
よあれ是ハくくひの場くるよひさ
くくくは民うくのくし今礒城よ
うはくて礒城ハ而北おくるよ古連旦

農 来 地 拒 戮

経の水をとりて東南源堀巨堀の中
きよらをめぐらひる周田をとりてみな渠
とうて面をふくし養実のうつ
ものしもれもち三のうくるの三腰なり
衣食のみれりとはもしもち二儀の陳
區なる地くるれりとふとりくとあ
ようつらくんやうる朴市田来津
ひとくもんていさめていくる硬城
と敵のをく間と一夜よ行へしあひち

うきことこれ甚なりおりくめこ
とあくそれくるをよひのくる
人それ飢も後なるほくふも先なる今
敵のみちよきくるゆくく刻柔山
険をきくをおきてとくくるぬせき
とれも山さのくくくくて谷せは
なしいまのて せあなやむゆくくる
し早地よくくいい何をもて周居う
こうもしてくふくもんやはひ

よいさめとおもひて 磯城より都そこ
もし百済をもくもんさめる兵甲
をおさめ舶船をうるく軍粮をも
くこもし大もし壬戌なり
二年春二月きのとのうの朔ひのえ
いぬの日百済より達金受ホをもし
てうきさてもうる新羅の人く
さらのみれこのほもりの四列をやき
并安徳ホのめ下のところをとれをこ

る磯城賊況さることもし故勢え
居をもれもちくりて列柔る居を
田来津のさのわ多きこの月
佐平福信りうしの侍従寺言ホ
をさてもう
三月前将軍上毛野君雄子ちうと同人
のむらし大蓋中将軍巨勢の人神
きの臣澤沼三掄君根呂のちのい
くさのきみ阿倍のひきのをん比
引 四臣

遣はしものをもて鎌柄をまつ
て二万七千人をひきゐて新羅を
うつむ
文五月ふねのうしの刻大上君と
ともにて兵の事を高麗うつまし
てうつる紀解を石城まうる紀解もれ
ぬくしんうちとる
六月前将軍上毛野君推のきみ
より新羅の沙鼻岐奴江二のさしとき
もの百済王豊璋福信うみとる
ふりん心あるもとうるひて草をも
て掌をうつち縛りきようつさ
さめうくせんもそもそもち
諸臣よりつていくく福信うつゝもて
よくのゝ朝人やいるやうる
達率德執得うまさく氏恵達人
をいゆるしのもとつそとうそ
福信もしもち執得よりきうみ

て膚物癡奴といつわ王ちゝひとを
ゝのゝてゝうゝて首をも
もそ　　脛
秋八月ゝうのえむすの羽きのゝむまの
日新羅百濟王のおのゝいくさのきゝと　良　将
こゝろせゝをゝてゝもちゝよ国よ入て先
列柔をゝとゝんゝたゝわゝうゝよ百濟
よ賊のゝはゝう物をさゝわて諸将　いくさのきゝゝち
よゝゝわていゝく今きゝく六日本国の　やまと

をゝひのいゝくのきみ　虎原君臣ち　こはらのきゝとん
ゝひと万あまゝをひきゝみてまき
よ越の海よゝのゝわていゝうゝと海か
くゝい諸将軍ホあゝうゝめゝうゝろ　くくゝき　こゝあく
ゝし我いゝゝゝゆきて白村よ食　くくゝき　こゝあく
せんとおゝふ法ちのくいぬの日賊のい　き
くさのきみ列柔まゝうゝてゝの王城
をゝうゝしゝうゝのいくさのきみ
いくさ舩一百七十艘をひきゝみて白村　くくゝき

の江より出でたちのぼりしの日
日本の船師もしめよいる者ども
ろうの船師とのひとつふ日本
不利て退りろうこ伸をるめて
りう出ちのとの日本のいく
さのきみさちと百濟王と元象と
とうもしてあひるわていくく
我小者をいのそいてれとのつる退
しといひてまる日本の乱伍と中

軍のひとしまうをとひきめてきんて
六唐軍とうつりうらるもりう左右
りう船をしきみてめりさふと
きのまる官軍ぐれ水より赴てみれ
死りのおほく艦舳るるる
朴市田来津天まあふきてちうつ
て蓋をひしもいのて数十人
とこうてうよるひうせぬに
の時る百濟王豊璋と数人と船りの

て言葉ようにを去めぬ
九月のとのいの朔ひのとのみの日百
海の列柔城もしめてりらうす
もたりひめこの時国人あひつてい
翔〳〵列柔もひぬ事いんとい
ふとも〳〵百海の名今日よりへぬ五
墓の所あるもゆんやさし
五禮城よゆき〳〵日本のいくさのきこ
ちよあつて事をあひとも安と

もるをもるもし枕ひよりもの
枕服岐のさいもんを妻子ふよ
もしへて国をさる心をもしむか
のとのそわの日半夜よみちさちそと
川のとのいの日五禮よりもきのいぬの
日日本の船師をもひ佐平余自信と
そつ木素貴子谷那晋首憶禮福
留なひよおほんゝ木五禮のさ
しよるの明日舟もしても

めて日本よゆく
三年春二月ちのとのうの朔じのと
のいの日天皇大皇弟よみとのをし
てのまきに冠をまきて位の階
名をしひ氏上氏部家部本の事を
まうんとのまふそのまの二十六
しるあの大織大縫小縫大紫小紫大錦上
大錦中大錦下小錦上小錦中小錦下
大山上大山中大山下小山上小山中小

山下大乙上大乙中大乙下小乙上小乙中
小乙下大建小建これを廿六階とん
前の花をして錦とひきんまちしよ
うまきて十しれをまそ又さきの
初位一しれよりまうて大らん小け
人二階ととそこれを吳なりとそあり
といるひよ前のまきれるの大氏の
氏上ハ太刀をとるまうて小氏の氏上よハ
小刀をとるまのまうや佐こ本の氏

上は千楯弓矢をこまふまつの
民部家部をさらめ治
二月百濟王善光王ホとりてなは
らを居らうむほ京のきいはを
つることあのこの春地震
文五月ちのくさらの朔きのえ初の日
百濟の諸將ほらうしんくらんてうき（列 仁 願 朝 敬）
人大夫くらむ（郭）ほ（弩）ホをまつして（惇）
表函と献物ととてまつこの月

大家蘇我のむしまちきみ薨（或本八日）
（大臣薨 注五月）
六月嶋皇祖母命（薨）あうまん
冬十月きのとのいの朔ちのくらの
月郭弩惇ホらちまつこの日なりい（中臣）
ゑのうちつまちきみよみよほて
沙門智祥（門 臣）をまして物をくらむ
そうよらうちむちのくらの日
郭弩惇ホよ宴まふこの月高麗の

まちきみ蓋金の国よりみうせぬ
児等よりのちこゝにいたる汝ら兄弟
あゆなるもんとゝ兵と水とのごとく
ちゝとくゝあるとなるあそひそのの
くのごとくなるまそけるそ隣のゝ
めよりもんへとゝ
十二月きのゝいぬの刻きのとのとの
の日郭督悩ふまつりの人この月河
ゝちの国よりまゝ坂田のうほう

の人磐城の村殿ゝ新婦の床席
の以婦ゝ一宿の間よりおひて穂い
てゝもそのあゝ垂穎して熟めゝ
明日の夜まゝ一の穂おひゝ新婦庭
よ出ゝよゝ十の穂匙大まゝ
おちゝゝ婦とゝて殺よあゝ殺えて
ゝめてとあゝとまゝそゝゝ
ゆの鴻ゆきの鴻ゝゝの国等よ防と
蜂とおゝ又ゝゝよ大堤とつき

て水をくくもうしむ名付けて水城とす。

四年春二月ちつのとのとのの朔ひのとのとわの日向人大伯皇女この月百済の国の官位の階級を定めつて位平福信らいくをもつて冠室集小小錦下をさつきのもの其本位八達率まくらのおほんきみ男女四百餘人あり。この国神前のこほりよりもつて

三月ミのとのうの朔きさきのみやめ三百三十人度出家そこの月神前のこほりの百済人よ田をうまし秋八月達率答炑春とまつて城を長門国に作りむ達率恒禮福留とりもつて四比福夫とをしくのくにまつて大野及椽二のさしをしてのりむ耽羅まつりまつせる使をうく

九月のくむりの朔うつのくるまの日
唐国ものてうさうん（朝敵）（大夫）ふ沂州司馬
上柱国列憲高木をまうして
等とい右戎衛郎将上柱国くる
のいくさのきも朝大夫ちうこくる
くむりぐん（将軍）（柱国）（郭）
（粉惊）
七月二十八日ぢちまつる九
月二十日ぢくまつる二十二日表函
をうてまつる

冬十月ぢちのとのいの朔ぢちのとの
とのの日大ま蒐道ま周ま
十一月ぢちのとのみの朔ぢのとのみの
日列憲言等ま餐ぢまつ
十二月ぢちのくいめの朔みとのいの日
物をまうとくうらまつちこの
月列憲言等まつる是小錦も
まのきみ大石等をうこうまつい
と云こ

等とい小山さういへのもしいくはみ
大史七枝治吉士針間をりつかけ
つ　のくらつの　はたしをとくか
五年春正月はちのくさつの翔つち
のくさつの日言葉ち前部能婁木を
まつてうつきうつてまつこみ日
耽羅王子姑如木をまつてうこて下
はる
三月皇太子うつつ佐伯子広呂のむ

らしゝ家よいてまつてそのやまひ
をうひまつてそとちはたうす
つ巳しいさちをきけきさまふ
夏六月きのとのひつしの翔はちの
くいめの日高麗の前部能婁木まつう
つ秋七月六水こみ秋祖調をゆう
さる
冬十月きのくむやの翔はちのとのむ
つしの日高麗ちまちきみ乙相奄鄙

ホをまして うつきさてまつら
大使さもちきみ いさう名人さう
副使ハ達相道二位玄武若光ホ
ゑ冬京都のねもみあふこよもきて
うる百濟の男女二千餘人をもて東
国ちちしむ 編素とく
らちへうつのとの いの年ちおこわて
三歳ほうるまて なるひほ官食を
さまりり倭漢の ほしし 知由指南

車をもてまつる
六年春二月三川の朔つち
のくむすの日天豊財重日足姫天皇
と間人皇女を小市岡上陵ほ合葬
さてまつる この日皇孫大田皇女をと
てみさきの前のもよもよ ぬる高
屋くちちきみ 御治ほ哀さて
まつるひつきのみこ皇女 きみ ち
まつわてのるまつる我皇太后天皇

のみとのもしまくら所をうけさ
まもりまもり百民をうれへめも
ゆる石櫛の役をおとさせこひ祈
もくい永代もてあきらうれいは
しめとせよ
三月のものもわの朔はちのものうの
日都をあらためうつしのふこの時よ
天下のおほんしるの都うつさること
を祈のももしてを風諫者多よ童謡

まもおほし日を夜を矢、火、処多
ちの
六月菖野郡の白鷸とさてまつる
秋七月はちのものひつしの朔はちのと
のこの日耽羅の佐平椋磨ホうつきと
てまつる
八月皇太るやまるの京よいてまし
冬十月高麗の大兄男生城を出て国
をめらうる城の内の二の才側助士

大夫の悪言を受てふきまて入そこ
まるまて罰生ちまてりつらし
よ入て其国をはらんとをて
る

十一月ひのとみの朔きのとのうし
の日百済の鎮将冒頭仁願熊津
のおほみ督ちの府熊山の城
冒ことひと上柱国司馬法聰法師
令て大山下境部のむし石積

ホをはらのおほみとりちの法の
さまちるはちのとみの日司馬
法聰ホまもかる小山下伊吉の連
博徳大乙下うさのを臣諸石をてを
冒はらしとをて冬十月やまとの国と
うやそのの城さめきの国山田のこほり
やまの城はらしきの国金田城を
はらく
国十一月ひのとのの朔ひのとのの

日ゝき十四疋鏡、十九疋 鉈二千四疋
鉄布二十四端 りゝきそのめの五十八端
斧二十六 鈔六十四 刀子六十一枚をもて
掾磨ホよりつかはす
七年春正月 ひのえいぬの朔 ひのえ
孫の日 皇太子あまつひつぎしろしめす
或本にいはく六年歳次ひのとの
うのとゝ 三月 即位
三月のえなりの日 まちきみまちよ
内裏ホよりあり 佐佐ちのえ
さるの日をもつて 溝恵ホ
まうす
二月 ひのえとのの朔 佐ちのえの
日古人大兄皇子のむすめ倭姫王
をもつて皇后とす 佐ちよ四
しらの嬪をめしいれの 蘇我山田
石川麻呂大臣のむすめを遠智娘こ

或本いはく美濃津子娘
一ならの男二はしらの女を生まも
皇そのいらつを大田皇女とまうして
の二を鸕野のひめみことまうして天
下しらしめしまし飛鳥
の浄御原宮におはしまし後に宮をふ
ちはらにうつりその三を建皇
子こまうして啞してえ語のまたは
或本いはく遠智娘一男二女をあ
きさねその一を建皇子とまうして
その二を大田のひめみことまうして
この三を鸕野皇女とまうして
或本いはく蘇我山田石川麻呂の
むすめを茅渟娘とまうして大田
皇女と讃羅々皇女とを生まし
ぎに遠智娘の弟を小姪娘とまうし
その名部皇女と阿倍のひめみことを生
まし阿倍皇女天下をしらしめしよ

おんてふちうのうやはおとう
まうて後は都をのがれ楽ようつしまて
或ときはいとく姪娘となりきて
桐井娘とまうす
はきはの倍倉椋戸呂大臣のむすめ
人つの被娘とまうす飛鳥のひめこ
こと新田部ひめみことあれませる
次は蘇我の赤兄のまうきみのむす
めもんつのひさちの娘いつめとまうす

山辺皇女を生まうす宮人のひこ男
みこひめみこ生ませり人四人そなり
是海のうやはこ小龍うむそめをそ色夫
古娘とまうす一はらのひこみこ二
はらのひめみこを生ませりその
一を大江皇女とまうすそのつまを川
鴻皇子とまうすその三を泉皇女と
まうすまうす栗隈首徳万うむそのと
八里嬢娘とまうすのひめこし

を生まる。道君伊羅都賣と、
また施基皇子を、また又伊
賀の采女宅子とまうす伊賀皇
子をあしまして字大友皇子とす
うす
夏四月きのえうの朔のきの日
百済より未都邪父を奉りてこ
つきまして
都師父等
むすの日未

五月五日天皇蒲生野に行
時に太皇弟諸王内臣とともに
きみたちみな
りて
六月伊勢王とその弟王と稚日女
うせぬ。いまし官位を
らす
秋七月高麗越のみちのくちを
まして
風

浪ふうきゆへよえうを栗前王
をもて佐くしの浮を時と
あふこの国謙武帝多く牧とき
て馬をもるゆまを越の国より燃土と
燃水とをさてもまうる又濱臺の下
ようとも水を覆てうまを夫
を食ふまを
を宴せむ時の舎人おほきて所
求てをんとをもるう
わ及

秋九月うつのくむまの朔うつのとの
の日新羅より沙喙食金東巌ホを
うてうつきふてまをひのをひ
ひの日中臣のうちつまろきみ汝門
法弁恭業をして新羅のおほひまち
きみ大角千庚信と船一隻をまい
むむ東巌ホる
布勢臣耳麻呂をてきのこ
きをうつまうて船一隻をけ

きんとうけんはよりひく
冬十月のころ　のおほいくさのきみ（大軍）
奕公高麗をうちほろぼして高麗の
仲年王もしめて国をうるとき千
歳おさまんとおもひて母夫人のいきく
のしるく国をおさめしゆへし（若を或本ゆく）
きんとうし今この国ほろひんことを
さる七百年のもろもろあるよしあり
十一月かのものみの朝新羅王より絹五

十疋もろ五百付ゆ一百枚をも
まふを金東巌ふるさつき於とうえん
ふる物をさまふおのく羌（れん）ありきのと
のものの日小山下みちのくの人まろ（道守臣）
吉士小禰をもまきよまそこの日
金東巌ふまのわかるゆほうし
道行草薙の剣をめもて新羅
ゆけゆくもれとみち中ふ風雨ふの
ひてまひてろる

八年春正月のえさるの朔ちのえ
子の日穂積臣忍坂をもてたてまつる
うしとよ年を
三月ちのとのうの朔ちのとのう
しの日馳羅王よ久々伎ふをまつる
てらいきさてまつるひのえうの日馳
羅王よ五穀種をこふこの日王よ久
々伎ふまつる
夏五月ちのえうの朔うつのえむか

の日天皇やさしし科し野よりまし法天
皇才茂原内大臣をもひまちきみ
さちこれあまつおほんをたうか
たる
秋八月ひのとのひつじの朔ちのと
のとりの日天皇高安の嶺よのたか
まりてちりて城をたてんとおほせ
まして民のたれをめくこてやうてたく
ひさうん時の人感てほあまこくこれ

きれもちゐたるくしみめくみの徳まさ
ゆさうわさうん人やとゝこの秋菅原内
大臣の家ゝ霹靂
九月ひのとのうしの朔ひのとのいの日
新羅より沙喰督儒ふとまうして
うつきさてまうす
冬十月ひのえむまの朔きのとのうの
日天皇菅原うちつまちきみの家ゝ
てまうしてうつうやひとゝとのう

ちうつうしはけてきいゐ甚うをう
きへまうしてきれもちみとのうし
てのうまけく天道仁をさきくとい
ふとれ人そきれもちいゐもと
なうん善を法人てあすのうひ
あうことをうこれうなうを
きへうき所あうゐきれもちきこゐつし
とのうまふこてうまうく臣を
てまおさしまうこまうまう何をう

まうさんさしその葬事まうし
く昭易うつし生てハもしもち
軍国ハ法とあり死てハもしもち
人そあつて皇祖さんとゝゝ時のとる
しひとき〻てはめてまうこと
の一言ハひそうむのさしひと
の善言まうさん大樹将軍の賞と辞
しうれう同年まして詔つきやの
へさうの日天皇東宮大皇子と後原

内大臣の家ハまして大織冠と大
臣のうみとさつものもしもち
うとうひて後原氏とゝゝ
うれうゆくさき通て後原まちき
とまうそのとのもの日後原のう
ちつまちきゝ薨ぬ

日本世記ハいうく内大臣春秋五
十ゝて私オ薨めりうと
山の南ハうつそれ天さんを泄も

してのこりし者をもとめ給
きさきあり皇子碍まいて
く春秋五十有六にして薨れ
さのち祥の日天皇菟原内大臣の家に
いでまして大錦上蘇我のあそのお
んなみとの母にて忌部をのさ
ふて金香炉をさゝふ
十二月大蔵の佐ゝ火佐ゝこの冬
高安の城を佐く母て幾内の田祝を
さめ給時に班鳩寺に火佐ゝ小
錦中河内のあゝい鯨を捕て
りゝらゝに佐のゝゝ佐平餘自
信佐平晃室集行に男女七百人を
てあゝこの国蒲生のこほりうつま
さゝらむまゝりゝらゝ郭
暫惊に二千餘人をまゝ
九年春正月きのとのいの朔みとのこ
の日十六夫に夫よみとの母にて大

宮門より射さしむ侍らのえねの日の
まけく朝庭の禮儀と行路とのあしさ
ゑとまも逕妄妖偽禁防
二月戸蒔を侍らねもしとうれ
ひとをやむ時に天皇蒲生の行
造迹野よいて宮地をみそな
もそまも高安の城を侍らて穀と
垣とを侍む久長門より城一つ侍らよ
二つ侍ら

三月きのえいぬの朔えつのえむ戸の日
山おか井のほうよ諸神の座をき
て幣帛あり中臣金連祝詞をの
ぬる
夏四月えつのとのうの朔えつのひる
の日夜半ののちる法隆寺より火侍る一
屋侍ら此大雨ふる雷震る
五月童謡うたふていく
うちもの侍あのあそひよいて

ませこさてのいへのやへこのもとにて
まつのくいもあるをいてゝアせこ
さまてのへのやへこのもと
六月邑の中より亀ゝ背より申の字
書せり上英より下玄し長六寸ゝわ
秋九月ゝのもの ひたの朔 阿曇連
類垂とゝきより水雄を
はくゝて治鐵
十年春正月はちのもの いの朔 のくねの

日大錦上穎、我赤兄臣と大錦下巨勢
人臣とおほとの みさくよまつて みつ賀
とおゝ止事まつそうつのとのうの日
大錦上中臣の金のむし 神事をの
まつそこの日大交皇をとりておほき
まつ政、とのおほ大まちきみより洋も穎
我のあゝのもとりて左大臣とし
なゝとみの金連を右大臣とゝなす穎戒
果安臣巨勢人臣紀大人臣をもて御

史大夫より（御史大夫 今の大納言）きのくるまの
日東宮太皇子（ひつきのみこ）みことのりをうけて（宣）
或本に いにしへ大女（施行）皇子のみことのりして 冠位法度の事をおこし（冠位法度）
ひたぶきに天下に ゆきわたしめ
の名は ふさに新律令をのせり
高麗より上部大相互妻を まして
うたきしてまつる みつのみの日百濟
のちの人しの列（鎖 將）仁願李守真をまして
表してまつる 月大錦下

佐平余自信沙宅紹明（法官大輔）
さつを 小錦下をもてきつ（鬼室集）
斯（学職 从）よさいを 大山下をもて 遠
率谷那晋首（兵法 ）
（兵法 ）
春初（兵法 妹）
ら人（弟を 解）鬼室集 位（弟を 解）
（丸金 頃）
小山上を もて 遠率 德頂上（弟を 解）
台大尚（弟を 解）きよ（許）
率つし（立位 明）角福（母）

年 陰陽は まさつを 於て小山下をもて
あ[illegible]ら[illegible]つをつ 逆 卒 ら五十餘人ヨさ
つきさきま[illegible]ら[illegible]さ 童 ら[illegible]ら[illegible]て 逆 を
さちたしもおの[illegible]る[illegible]
さすよめ[illegible]こき おやまくるめ
二月ちちのえうつの朔 つのくとのヨ
百濟より 墓 人用 善 木をまつて
うつきさてまつ
三月ちちのくいめの朔 つのくねのヨ 黄

書造本実水泉 さてまつきつのくと
らのヨひのちの国中臣部 若 こと
てすつる 長尺六寸 その生 ひの
つるりうしまて
文四月ひのとのうの朔 つとのうの
日漏 尅 とよいうて れよおきてもめ
て俵時 どうつ 鐘 鼓 を動 せけめ
てときのきさみをりちゆ 漏尅
を天皇 皇太 よよ
まつくときも

めてうつくしきものとなん
月はくまもなく八の足あり
康生て即死をとる
五月ひのとのわの朔のうし
の日天皇西小殿おもてにひつき
のみこまちきこしめす宴をもうす
ぬしひ田傅はすつる
六月ひのえねの朔はちのとのみの日
百済の三部の使まいくさの事
請

を宣しはのくにの日くるかわ
弁真子をもてこはさて
まつるこの月栗隈王をもてはく
しの帥よりて新羅はしをさ
してうつきさて水
牛一ツ上鶏一隻をもてまつる
秋七月ひのえうのの朔ひのとむの日も
ちう人李守真等をもてのはし
ものなりまつかる

八月きのとのうしの朔ひのとのうの
日高麗の三部大相可婁太まうる
みはのんむまの日蝦夷を餐さふ
九月天皇やまひ（疫病不豫）
或本八月天皇やまひ
冬十月きのえ寅の朔ひのえむまの日新羅
ち沙喰金万物太をまりてうつき
さてまつりのちひつしの日おほう（内裏）
ちよ百佛の眼開さてまつる月天

皇使をまりて袈裟（金鉢）このもの
象牙ちんせい（沈水香）せんとも（栴檀香）
りの珠賎を法興寺の佛りて
まつりめ法のひの日天皇
むとのみことの里て東宮（聖徳太子）を
して卦円よりあれてみことのし
てのまけ朕やまひ甚し後の事を
りて汝よさけくと云ふ
おみまして疾（やまひ）をまうして（固辞）

てうけ給はりて のち まけく 靖あ
まつひつきと大后よさつきさてす
つ月大夫と をりてりうくのまつ
ととと宣くてまつらしめさく
臣ひこりのくく天皇のおほんあよ
出家しておこなふひとまうし
給ふ天皇ゆきさまふ東宮(まうのみこ)うち
ておうみてをしをち内裏(だいり)のほとけ佛
のみあらのみいこよいてまして胡(あ)
殿

床よ(御座)をうけて髮(ひけ)髮とそり給
沙門(しゃもん)とうり給ふ天皇次田生磐(そつたのおて)を
まして袈裟(けさ)とくらしめのふみ
つのくむまの日(東)まけのきみ(宮)天皇す
まくまして野よまして佛
道おこなうとまうしのふ天皇ゆ
うさまふ東宮をいもちて野
よ入ふふ大臣ホをそうもつの菟道(うち)よ
まてうる

十一月きのえむまの朔うのとのうの
日はるかの国司ひをつくるの太宰
府よりて いそぎ月生二日はる
道久はるかの君薩野馬韓鴻
勝婆ゝ布師首磐四人りくうりより
きくりていそぎ りくりの使人郭
務悦ら六百さんそんそん 沙 屯 孫 ゆ一千四
百人をくるそんて六千人船四十七隻
よりてそよ比知潟よりまりて向
ひうていそぎ今告そうら人船
うそおほ さちまちよりこまい
くいおそくくはのせきりおそろ
きてしこうそんをもちて道久ゆをは
りてあるのうめのうやくさす耒
くるくるそをまりひんひのへ 朝
さつの日大友皇よおほうちの西殿の
織佛像の前よりまりて九大臣蘇我
のあそのはそん 赤兄 右大臣中臣のうねのむ

らし蘇我果安臣巨勢人臣紀の大人
の六人ものみこ手ま香炉
をとりて先誓盟をさてのまけく
六人心をひとつにして天皇のみと
のをうけさまつりしもし
もつかいつりを天罰ふりんと
云こゝろ左大臣蘇我赤兄臣大手ま
香炉をとりて次のまけく臣血てあ
ひてまけく臣等五人敬下

のまけく天皇のみことのをうけ
こゝをもんりしさつりんつかし哭
王うちしたく天神地祇まつれ
ひのく三十三天あきらうる車
をうしめし子孫まきよく家門
をほんひんとゝひのとの
みの日あふみの宮ま火ほく大ふ
ほうこの三つあくら出ほた
のくいぬの日五臣大友皇ま殺てつ

是天皇のみよに盟してまつ
る日新羅王より調五十さを絶きめ五
十さを一千付さを幸一百枚さうて
十二月うゐのとのいの朔まるのうし
の日天皇あふみの宮よりあすか
うのとのとわの日新宮よりうせ時
よ童謡うたて云
みちのくのなのゆあゆてて
ちさくりこきおくるそれきのと

せわのりとあれたるそ其一
をこのうのやのひりくひくさよ
いまうとゆをみこのひとく其二
あこさのいゆきをうまくそそハ
るのはてとくしえん其三
はちのとのうの日新羅ちうきさて
まつはひ決飡金万物ホまつうう
こくこきの国山田のうちの人
の家よ鶏るの四あ なの又大炊有の

八の鼎鳴とあり　ひい一鼎鳴あり
ひい二あり　ひい三とあり　鳴あり　ひいハる
ゝゝよ　鳴

日本書紀巻第二十八

天淳中原瀛真人天皇　天武天皇

天淳中原おきのまひとのすらみとは
天命開別天皇の末なり　母みことのひめ
武ハ大海人皇子とまうす　生まれ
ます　岐嶷なりまして　壮
ましまして　天文
ようおんてお　雄略　神武
道甲ようまします　天命開別

天皇のみむすめ菟野皇女をもて
きて正妃とし給ふ天命開別天皇元
年より立て東宮となり給ふ四年冬十月
のえさつの日天皇卧病しきりにて
ていとまもことさなりうる蘇我
臣安麻侶をまして東宮とのして
みあるを引入しまふ時に安麻侶も
大殿
ともに東宮のうちにしたがひ所の
ひそかに東宮を領てまうさく有意
のまゝに東宮にゆづりまつるべしと天皇
東宮にみことのりして鴻業をさ
ぢまんとのたまふ辞譲て
のたまはく臣いまだ幼くして
病さはなる人なり社稷をもて
人物のたくい陛下天下を牽て皇后
にさづけ給へ大友皇子をもて
ちゝしく儲君とたまふ

臣ハ今日出家してもろもろのみ
さめを切德をおこなはんとす
うし於天皇ゆるし給ふ日出家
して法服きふまとてもろもろの
兵器をもつてとく〳〵司よおさめ給
うつのえむまの日吉野宮に入させ
ふ時に九大臣蘇我赤兄臣右大臣
中臣金連とよしおけきのはかせ
法師蘇我果安の臣志をもつて

入納言

まつ是荒道にあるいつ人のいつ
く虎に契をつけてもてこもし
鴻宮にたちまちのちひつし
の日に野に出ておもまん
この時に諸舎人をはしてもつて
のまもく我今おこしひ出家とそ
故まもく如こもつ人と如なるもの
もこころにはれのはしるまら
て名をなをんもなるものハ

入道修行

て司ることまつりごとのまふされ
ともまつりごとのうしまつ舎人を
はしめてみことのりしふことあの
ことうことりて舎人ホ羊八人さす
ほ半を退てめ
十二月天命開別天皇くれまして
元年春三月うつのく川の朔つう
のとのとりの日内小七位あつみのむら連阿曇
し稲麦をはくよまつて天

皇の喪を郭務悰ホはをさむこと
こと郭務悰ホこくくと喪服きて
三遍うつさて拝哀まつつ東よむつてお
むうつのえのの日郭務悰等たつて
書函と信物ととさてまつつ
戊辰月のとのうの朔うつのえとの
日甲胃弓矢をとりて郭務悰ホりさう
ほこの日くくむ郭務悰羊ホりさまつつ
物もつて絁郭一千六百七十三疋布二千

八百五十二場縣六百六十六町はちのくに
の日言葉はせ人高加井を
まして　前部　さてまつるのえ
さるの日郭務悰ホまうこの
月朴井連雄君天皇よましてさう
さくにたくさくの事をもてひと
を美濃よりぬ時り朝廷よりこの
おもの兩國司よたのもしてのる
さくに山陵はくにんこめよあり

人丈をさしさむもれる人こ
とに兵をとしめと呂れりら
く山陵のさめるハあしるを
事なる人るもをみやこさ活と
をはまこなやうきことあんるあひ
ハ人ありてまして場さくあ
うの京よりやまうの京よりまて
処こよ俵をおるるまて又うちのるりと
よおほせて皇大弟の宮の舎人の

まくらの根をふことをもくし
天皇をうりてもひあきらし
めるまふ事をてまきとりとさとり
すそこうみとのうしてのるまは
く朕位をゆつる世をのうをゆくもひ
うやまひとおさめをまうし
てひるふる百せをおんとりうち
うまいすやむことをえびしてまきも
をうくるいうんぞのうして身をは

ろはうんや
六月うのとのうの朔うつのえむさの
日村国連男依を和珥部臣君手身毛
君広ひろしまこのことのうしてのるさ
く今きく近江朝庭のまちきうち
ち朕をうそこれをんとおこうを
て汝ふち三人をうやうこの国は
ゆきて安八磨郡の湯沐うれい命
し多臣品治よつもてをうこのめ
械

国立公文書館
National Archives of Japan

まを宣志めて先尚郡の兵をおこせ
よって国司等まれて諸軍をそ
むいて志きりは不破道をふさけ朕
いまみちくむいとのふきのえ
とりは東より入りて時は一の臣
をもって軍してまうさしめ
このまちきこうち謀へありやなや
うけを天下を造をもちうむか
さうんなんそ一人の兵をんつ

人をんそ一人の兵をんつをして徒
平東より入りそ臣おそくい事に
うまをきことをとまうをそ天皇に
ぶまうをまうを男依土をの忍さん
とおのほををもちを大分君恵大
黄書造たほうもあふの臣志摩を留
守司さっさうのみこのをまうして
驛鈴をこをめ始をうして恵尺
ホをうをうをのうまけうり鈴

をえもはもしも志摩ハくわてく
ひとことまうせ恵尺もはをてあ
みゆきて高市皇子大津の皇子と
のりて伊勢ゆさいをのこまふをて
ゆりて恵尺ハ留守司のりとゆる
ひて東宮のおほんとも奉て驛鈴
を高坂皇子ようふたゆんを
時ゆ恵尺ハふゆき志摩ハを
ゆりてくがことまうして

まうく鈴をうけたまはりこの日みちさ
ちして東国ゆ入まふ事りを
ひて駕をまちさきをていてゆ
せりまりゆ縣犬養連大伴ゆ鞍馬
なりまりてりて御駕をしまりさ
きハ輿ゆのせまつりてみとりゆさ
むつ津振川ゆとんて車駕を
めていりまりて乘をこの時り
りとりみとりひと草

壁皇子（名壁）の御子の舎人
朴井連雄君（孫）あり
し大伴佐伯（養）の子なり 大目大伴連
雄摂部臣（国）五十瀬（首）、舎人のとう
と根広呂（書）舎人のあり 直
智徳（小林）、山背（上）の小田安斗（智徳）部
智徳（調）、のとうと渟海（首）
の子なり二十を餘人めの舎人 十を餘
人なりの日 荒田井（女）（儒）吾城（あき）大（者）

伴連馬来田（むまくた）きふみ
の子なり 野の宮より おりてまうる式
きは屯田司の舎人土師連馬手（はて）おは
人なりは ひとり食（くう）てまう
る耳羅の村を面（つら）のうちと二十餘人
なりの大伴朴木連（えのき）おほくる猟者の
ひとこ（育）みなりはいもことくく
めてみなりはいもしむまま
美濃王を外（そと）もちはうた

むきておほんとも ひとまつ湯沐の
米をもふ伊勢国の駅五十匹荒田
のうちの家ひとあひまつりて
ふれ米をもて からひとつのしむ
大野よりわたりて日くれぬ山ゆゑ
て進行ことあるまれもち者
邑の家の籬をこはちとて媚とて
夜半よりおよひて隠のこはちとて
て隠の驛家をもつて邑の中

よ自ていたく天皇東の国よ入る
故人夫ともさらくしてとこれも
一人もえさうこそまきよ横河をと
うんて黒雲あてひろさ十餘丈天
よりくれる時天皇あやしめ
まして をれもちひとと
のひてうつりこうてりてうつて
のうまけく天下ふちよりうん祥る
ひとちうる朕時天下をえんと

国立公文書館
National Archives of Japan

のうまをれもちもちろよ行て
いののほうよりうまをいうのむまや
とやきていうの中山うくるまんちう
うよ当国の郡司小牧石のいくさをひき
めてうわまうあいをほのうう野
よいうまうまうちぐく駕をとめて
進食を積狭の山口よりうまうまと
き武市皇子康深ようて過さす
うの民直大火あうそあの造徳足

おはうのあいひろそ坂上直国
ノ呂ういちの黒ノ呂さけさのさ
いとこ膳香尾臣安倍おけんとを大
山をこえていせの鈴鹿よりうまうまこ
こよ国司守みやけのむしいくとこ
分三悪君こうくをとし湯沐うれ
田中臣うまうまる高田首新家
等をうのこほうよりうのうをれ
ちちまう五百のいくをおこして

そうの山造をふさき川曲のさうと
よいるとまして日くしめきさきの
はたらしまふゆるまちく輿をと
とめてやもむちうる夜くもまて雨
ふりるんとそえひとしくやもみす
さて進行うるさむくしていつつち
るり雨ふることもれもし送駕
者きりのれてさむきことうえも
三室の郡家よいうるまちんて屋

一間やさてさむもものをあこのし
むこの夜半よもうのせきのはさつ
ひをまもしてまうしてすうさく
山部王石川王なるひまうれる故来朝
罪よもんしむとすうを天皇を
るもち路直益人をしてのうむ
ひのいめの日旦あうけのこうの近と
大川辺よ天照大神を堅洋こふこの
時益人まうしてまうしてすうさく

関よりすすしむるひとい山郡より石川王より
すすしむ是大伴皇子のとさすそれ
すすむ益人のまるくまうきすすわれ大分
君惠尺るすすの吉士三国こまきのすするとと
一人山辺君やをすするとやすすのみて渠郡賊
拱おけきしすする臣根連金身うすすしのき
せうすすおけんすする佐ゝすつ天皇大よ
背
すすこひまして郡家よすすんすす
於男依むすやの馬よのすてすうまて

まうしてまうす美濃のいくさ
三千人をかうして不破道をふさき
川とまうすこする天皇雄依の勢を
けめ於をてる郡家よすすいすすまして
先高市皇子を不破よまうして
いくさの事をうんかんしむ山背郡小
田安半連の貿布をまうして東海
のいくさをおこさしむこの日天皇桑
名の郡家よとすする於をすすうた

をまわていてまさしこの時あふこの
朝よ大皇(おほきみ)寸東国よ入まをしときき
こゆのまちきをしもあるよくお
ぢて京のうちさもくあるひいのう
也て東国よいくんとおもひあるひい
退(のき)て山沢よのくれんとをこうよ大女皇
るまちきみうちもうをてのるまは
くいのんとうをんひとわのまちきをを
んてうをさくををくををはまをう

をくれなんきみやのうをきむさいをき
をはぐくて酒(をを)よのうておをんよいをう
しとまうを皇(みこ)よるをうひはをん
をくれもち韋那公(うなみ)いをを鉄(くろがね)書(ふみ)のあ直
さいくをを(宗)をさ(忠)をさのあるいた摩呂(坂直)
をりつて東国をまを穂積臣(ほづつのおみ)と
もうをとひ寸百枝(百足)物部首のとう
と日向をりてやまをの京よまをそ
佐伯連男をはくまを樺使主(かばのつかひぬし)

磐手と吉備国よりまゐりてなひよ
とく〳〵兵をおこさしむるなり
男と磐手とよりてのるまはくか
のごとくの大宰帥栗隈王と吉備
国守尚肇公廣嶋と二人のもの
太皇弟よりたまはりてまゐらす
さうくいそむくことあんな
まいりうちぬ色ぐまいちころ
せとのるもふこと磐手きびの国よ

りて舟をさはくゝ日廣嶋をなと
むるてカとちかしめ磐手まゐら
カをもいてころしめ男つるよ
いまゝ時よ栗隈王を舟てのる
みをうけてこゝてまゐはく
しの国ハりもの過城のまさも
とまりその城をさゞし煌をす
くて海上のそみてまのをまは
あよ円のあゝのくめりんや今命を

つ こまていくさをおこさはをのもち
国宝なんのしおりひのほうまをか
る事もんつはひらふる社稷の
さふさるんたからしてのちる百さひ
臣をころし給ふとうとも何のしる
しうもんつんあるはつて徳をも
んやうやもく兵をうこさるいそ
れこの縁なるの時も栄隈王のふる
の子三野王武家王剣をきて側り

立て退ことるこてよ男ともをう
ちもりてもそまんをおりんとうつて
けるけきもんこともたそ故をと
えるきもしてむるくうるぬ東の
るんの驛使磐鉄小不破いこう
るんともちうこき磐鉄ひとう山中ま兵
あるんこともうるひてをくれてりて
緩々ゆうう時ま伏兵上るる出て茉小
う後をとうきる磐鉄えをみて茉小

うちたち、ことをさとりてうるも
まけてもづかよのうちことをえうり
の時は御うつて大伴連馬来田才
吹負なるひよ時のくらあをみて
やまひとすうしてやまもの家に退
ぬうつしてそのあさひつきちろ
しのさんをうれも吉野よりし
さて大皇弟なる人をふことをされ
をうをりて馬来田さきよ天皇り

まつるさし吹
負をさきてすもて
時よりてくさ
おりひてもれもち
やうをもひりふるの
くまつる数十人えるひのと
のの日高市皇子佐ひと来名の
部かよりてまつりてまうさしめ
給ふ御所をとうまいん

ゆゑ政をおこなはしめ使をしたかはしめ
くちき処をたづねたまへりしに
そのまゝその日天皇皇后をと
めまいらして不破の比及郡家に入さ
ふおもちの国司寺ちいさうのひし
鉏釣二万のいくさをひきゐて帰さ
ゝる天皇をいたゞきほめまいて
そのいくさをくはへて処々の道を
ふさゝる野上にいたりまいてとき高
市皇子和尊をもちむかへてのて
をいたゞき下うしさきのふ
あふをの朝まのの驛にたゞちにゐる
まうして伏兵をのてとゝのへしひと
書直茅忍坂直大麻呂ちいたちへ
ゆくとゝはうてまうさく吉野
よりまいりて大皇弟のさゐの東国
のいくさをおこしよりまいて韋那公
磐鍬うちうなりまいて磐鍬と

兵のれこうをみてきりけてくちぬと
ア[illegible]そとさうし始まで[illegible]て
天皇高市皇子よりうてのうさ
まくのあふこの朝ま八方右の大臣を
よひしこきまちきみちちまは
うわことをさうむ今朕ふたりま事を
きうんひとめ[illegible]さいとけうき
まうふこのうちのいうせんとの
さまふ皇子磯月をひちち剣をそ

ちちもてまうしさけあふの
まちきこうち多ちとふちんそ
あへて天皇のみうさの蓋ふうさひ
らんや天皇ひとけらまさそ
ふとも臣高市神祇の霊ちち天
皇のみとものふこうけて諸将をひき
みてうんあるみ[illegible]とのうん人やを
うう天皇けめまして手をとりて
背をとりてのうまけくけうしんて

おこらくのうしとして鞍馬をさう
ひてあまのいくさの事をさつ〻孫
皇子もちもち和墾よりくわ波天皇こ
ろ行宮を野上よりさてゝおもしま
ろ夜雷電雨ふることまくさなわもれ
もち天皇祈てのまけく天神地
祇朕とともにさきみなわ雨や
めゆくものゝまひおもるよもちもろこ
なわなめやみめ波の日天皇

和墾よりいてもしていくさのことをうん
くてうつまもて波ちのとのうしより
日天皇和墾よりてまして高市皇
子よみものゝしていくさのひと
よ号令し波天皇まこ野上よりくわ
ておもしまもてこの日大伴連吹負ひそう
よ留守司坂上忠節もとものてひと
をふことの漢直ホよろわて云
我いはもちて高市皇子とのわて

数十の騎をひきゐて飛鳥寺の北の
みちより出て宮のそもん海を内
よりまはして兵を百餘
の家よりくろひ南の門より出て先秦
造鮭より憤鼻せさせ馬よりとてもせ
しめ寺の西の宮の中よりしめ
ていく高市皇子不破へいる
まゐいくさひと多よおほんとゐて
こゝより留守司高坂王をよび兵をれ

こせたひ穂積臣百足を飛鳥寺
の西の槻の木よりて宮はるる
百足小墾田の兵庫よりもんべ
て兵をあつめさくとしきよ
宮の中のいくさひと熊ゐさけぶこと
聞てとくくよりあつまりてた
伴連吹負数十のむさいくさをひき
ゐてまはりきくをれち熊毛
諸垂等と連と和いくさ

まさつろを もちて高市皇子の
のみことのを 奉て穂積臣百足と小
墾田の兵庫より ふくろ百足馬よの
ものを たてまつる 飛鳥寺の西槻の
下よりをりて 人あつて馬ものおりよ
といへる時 百足馬ものたてまつる
そのもの 襟をとりて引お
とし 射て一箭あてつて刀をぬい
てきりころしぬ もちて穂積臣

五百枝物部首日向をもちてよりまして
てゆくていくさの中よりをりさ
高坂王 稚狭王をもひていくさ
をすむ もてて大伴連安ノ
呂坂上忌 老佐味君宿禰ノ呂ホを不破
の宮よりてまつりて事のつたへ
うさむ天皇 おほきみこひさま
ふよりを 吹負をして将軍
よ洋しむ この時よ三輪君高市君呂

鴨茂若姫夫人をひ羣豪傑者ひ
きのことくよあすの将軍の麾下よ
はたらくてをりをり近江とおそれと
けうとくして流中の英俊をえひ
て別将をもひ軍監とをつのえとの
日まいの乃樂よゆく
秋七月のとをの朔のとのうの日
天皇紀臣何用ノ呂多臣品治三帰君
子首置姫連花をまして数万の

いくさをひきゐて伊勢の大山をこえ
てやまとを向しむ我国連男依書
首根ノ呂和珥部臣若手膳香屋臣安
倍をまして数万のいくさをひきい
て不破を出て赴あをを入しむ
その流をいふこの帥て別をきを
おそして赤色をもて衣の上ゝ佩し
つゝしてのちよ別ゝ多臣品治ゝ
みことのりして三千の流をひき

あて薊荻野よりいそぎまむ四中臣
呂ノ呂をもて倉歴道をまもり
む時より迫山より山部王蘇賀臣黒安臣堺
臣比等よりおほせて数万のくさをひき
いて不破をたてまつる大上
川の濱より山部王蘇賀臣黒安臣堺臣
比等をめりこうこうこうこうし
ようして軍をまれまれ蘇賀
臣黒安いめみよりつりて領を刺

て死をこの時よりあふこの将軍羽田
云矢国その子大人等おのがやをを
ひきあてまつりてつりて
斧鉞を授て将軍は洋をもちて
小のつる鉞より入むは是ちさきよりあふこ
より精兵を放してさちまちより玉倉
部の邑を出すもしもしも出雲臣
狛をまつりてこれをうつむ
うのそのの日将軍吹負乃樂

山の上よりいもめを時に荒田尾直赤
ゑ広将軍よりまうしてすうさく
古京に是東の宮の処なりしく
国もりつし将軍こうしまさ
もれもち赤ゑ広忌部首子人を
まうして古京をもりしむこ
ま赤ゑ広ホ古京よりいりて道路の
もりの板をこうちとりて梢りて
くも京のほりもの御まるりて

りてまりこのものとものみの日将軍吹
員とあふみの将大野君果安と乃
楽山よりふ果安ふりゆ
れていくさひとことくくを走め将軍
吹員もつ身をまもることと
をこ果安をふていりて八口
よのりて京をうりまこと
梢をふもりの伏兵あり人ともと
うひてもれもち稍引て

つゆぬきのこむすめの日あたのもけ
いらつのきみ田辺小隅ノ深山とこえ
て懺とまさ載を挽て倉暦ゝ立ち
夜半とりて梅を銜て城を寧あて
て営の中ゝ入れもち已ういくさひ
とゝ足ノ伯ういくさひとゝ別るきさ
ゝとおそれてりつて人ゝ金とい
ひてもちりカをぬいてうしむ
金といちりのをはをもちち斬の

みうゝ足ノ呂ういくさひとゝくく
ゝうれをうゝ車ゝちまちまおこ
見てせむもゝしらもさし足ノ呂
ゝくうれをさゝりてひとり金とい
ひてもりのゝまめうゝゝゝ
きのとのひ[illegible]の日小隅まそん
て荊荻野の営とおそゝ人とおりひ
てゝちまちゝいうゝ将軍多
呂品治遮て精兵とりておりてこ

まとうつ小隅ひとまもりして走
めこれもの〻ちかひまを未もい
の〻こうの日男依等あふこのいくさと
息長の横川よりさうひこれをやふ
まてその将境部連茅を斬をつち
のえいめの日男依ホあふこのいくさのき
み恭友足と鳥籠上ようをてこれを
うちてこの日東道の将軍紀臣阿閉
戸臣ホやまもの京の将軍大伴連

吹負あふこのさあよやふまもしと
いふこもと聞てをれもちいくさを
くもめて置始連菟を荒をまもして千
餘騎をひきみてしきまやまもの
京よ馳しむ
うつのえもの日男依ホ安阿の濱
まもをひて大よやふりて社戸臣大
口土師連千鳩をえうもひのくむ市の
日栗たのいくさをうけてこれをな

かのとのいの日男依等瀬田よりる時よ
大友皇子とよし君羣臣等そよ
橋の西よ営しそ大り陣をはりて
その後ろそ旗幟野をうへしちそ
天よつるる鉦鼓の音数十里り
きこゆ時りる号令れそ
て矢の下ると雨のごとそいき
のきみ智尊精兵とひきみてりく
ときりてふせくりて橋の中

をきりうれと三丈ばかりそ
て一の長板をおろうしそ板をふ
てりるりのあはそしそ板を引
ておとさんとそうをりてえそみ
おろんこうしけきひとりの大
分君雅呂とふそしそ長弟を
そて甲をうるのきて刀をぬき急
よ板をんてりるそしそ板よ
はをる綱をきりていけと

陣よりいくさひとくくるる
まてあしきをよきぬいまもへのそ
時よいくさのきみ　智尊さちとぬき
てくくりのを斬たまえこと
らをよりてのの智尊とはのほと
をよくくをれを大友皇子左右
大臣ホくくよ身をのくりてのて
けめ男依ホをれくく栗津岡の下
よ軍をこの日羽田公矢国出雲臣狛あ

ひくくよ三尾の城をせめてくれをホ
さのはむくくのの日男依等
あくくのいくくのきみ大養連五十
君をもち谷直塩手を栗津の市よ
斬をくくく大友皇子を追て入さくく人
州をくくをくくて山前よく
くくてくくくくくの時ホ古
右大臣をもひまくくちきみさくくしあ
らをくくせめくくし物部連ノ呂ホ

さ二の舎人おほんとものをめさ
しめいたるのきみ吹負乃楽よりゆき程
田よりつかはしし人あつていたく河内
ものいくさおほくいでこもれり
垣本臣賊長尾直真墨倉椎直广呂
民直小鮪谷直根广呂をまうして三百
のいくさひとりとひきゐて龍田より
くまき佐味君少广呂をまうして
数百人とひきゐて大坂よりいでゐる鴨君抵

夫をまうして数百人をひきゐて石
手の道をまうしこみ日坂本臣賊
等平石の野にやどる時にあつら
のいくさ高安の城にあつまりきて
をるのもれるあつまりのいくさ賊
ときこゆるをきてことくく
秋祝倉とやきてうれちしこても
なほもち城の中より宿め會明より西の
方をのぞみたれば大津丹比のふね

の道よりいくさひとおくりされを頸
に旗織をみて人あつていたくあつ
のいくさのきみ壹岐の史韓国のいくさ
なりと賊に言安の城よりくるりて衛
我河をまもりて韓国と河の西よりし
て賊等いくさひとまくるくして
えふせぎて是よりさきよ紀臣大音を
まもりて懼坂乃をまもりしむこと
賊等懼坂より退て大音の宮よりちんす

この時より河内国司守来目臣塩籠不破
の宮よりまもりむかんと思ふこと
つていくさひとりをあつむこと
韓国いくさてひとりをなすことを
を用て塩籠を入うさんとて塩籠
事のまもりをさとりてをれい
ちらつつ死を一日とりてあるこの
いくさ諸道よりあつまれいくさ
をしちらるひよりえあひしらいまん

解てすこく退ぬこの日将軍吹負あ
ふるのいくさのさあるよやぬれてひ
ちかふるのもりいくさをひきいてよ
げゆく墨坂よりすんてさすく菟う
いくさのいるよあるとまるくわて金
綱井よいたみてあるきしいくさひと
ちをきつとこるあるこのい根
くさハ坂道ゑるいくさと聞て将軍
いくさを引て西よりゆく南麻のちまる

よりてて壹岐史韓国のいくさと葦
池のほとりふるくさ時ゝ弟士未日
とりふのあつて刀をぬきてちきり
よ馳て直ゝいくさの中よ入騎士徒童
てちくむもりあるこのいくさ
とくくゆくおるく斬し巳
多ものこるよ将軍いくさの中よ合し
ていくさし兵をおらせりとのころ
を百姓をころうんとあるい

是元亀のさぬるわ故こるわるるうし
そこるる韓国いくさをもろれてひとち
く将軍もるるに元をみて未目と
して射さむ之れもあ
らそして法ひはまてのぐ
ことこるる将軍まき本の宮よる
時る東より師きわる多よいるる
もりもちいくさをくるもておの
上中下の道るあて合いもむさし

将軍吹負こるる中乃よりの道
こるるあふこのいくさのきし大養
連五十君中造るいるるて村屋る
まして別将戸井造録をまして
二百の精兵をひきみて将軍の宮を
衛しむ時る麾下のいくさもれ
うして こるもぐもこるる大井寺
の奴もこるる名い徳广呂ホ五人いくさ
るもる法のまつまれもち徳广

呂木光鉾となりてもんてりてこ
きをいる鯨ういくさえをひこの
日三偏君高市麻呂置始連荒も
上道よあるつて着陵よさいのひたよ
あふこのいくさとやつて傷よのも
をりて鯨いくさの後をうつ鯨
いくさとくく解きて多よいくさひ
ところうつ競も白馬りのてよけ
ゆうつ馬遅田よおもてえをこゆう

ををもりもつ将軍吹負甲斐勇者
よのうをていつくよの白馬よのも
ひとい庁井鯨をあしきうよみふ
ていうつせとうる甲斐のいさひと
駑ておひゆき鯨りをこうひ
鯨しきのよ馬よもちうつて馬うくめ
きて遅を出てをもりもをゆきて
まあつうことをえつう将軍まる才
の処りくあて軍をこれなゆく

さ紀あふちのいくさ敗ひしよりこの
を見なわさきよ金剛井よりいくさ
せしとき高市郡大領高市縣主
許麻呂ひてえりのいそ
を三日のいちまもり神をて
りてのまもり吾ハ高市の杜よ
おろ名事代主神まも事代社り
おる名ハ生雷神をうもしもり別し
てのまもり神日本磐余彦天皇

の陵よ馬をひくさくの兵器を
てまつまもれもりまのさまし
く吾を皇御孫命の前後をもちて
不破よをくりまつりてえかを
今をまも官軍の中よりちてさ
りまもりをよまもの西
道をいくさひとのまをいるを
なんとそもしくしもしとい
ひおもりてをりさめ故を

をもてをがみもち許梅をもて御陵
を祭り拝むてよりて馬をもし兵器
をもてまつる又幣をさしもて高
市身狭二社の神をいわもひまつる
しむ云うしてのち壹岐史韓
国大坂よりきうる故時の人いうく
二社の神のもうしへ辞まと
よ是なりと又村屋の神祝よりうもて
のるまけく今吉社の中道よりいくさ

ひとりもまうる
社の中道をゆきくしと故いまる
いくさくの日をつもて戸井造
鯨いくさ中道よりの人以
らくをがみもち神のをくさまく
ら辞うるかといくさのまつりをと
をてり如もち神のをくさまく
神のをくさまふ言を挙てすう
しさてまつるもれもちみとの

もて三神の品を愛でめ
まるらしめたまうのちの日将軍
吹負をして倭地をさめてきれ
ちち大坂をこえて難波よゆく
これもほの引将軍おのおの三
の道をもて人て山前よりわて
河のみなとにいたる将軍吹負難
波の小郡よりて仰て西諸国司に
をりて官鈴鐸鈴傳印をしてど

けるしむ うつのとのうしの日
諸将軍に とくくま篠波より出
てて右大臣とし諸罪人等
をさめとき のきのうの日将軍
等不破の宮よりづよりて大友
皇子に以をさけて宮前よりて
すけり
八月のえさるの朔きのえさるの日高
市皇子よみとのりしてなのみ

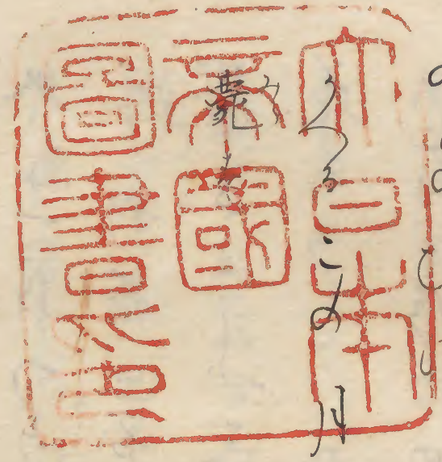
のまちきみ・さちのおほうち
を宣をもちて皇罪八人極刑
ようくようたて右大臣中臣連金を
浅井田根を斬さうむ四右大臣
穀我臣赤兄大納言巨勢臣比等を
ひる孫并中臣連金のる穀我臣
果安ら子ら配流これらは
はとくくゆるされきさ
きよおもちの国司等女子部連鉏

鉏山をうくして死ぬ
天皇のまけく鉏剣を功あるし
ものなりはしるなんそらう
ち死めるそれせるとなの
ちう
ひのいぬの日緒有功勲者をめくて
のみとのして寵賞を別て
九月つちのとのうしの朔ひのえ
うまの日車駕くちまて伊勢の桑

名は宿さまふ　ひのとのうの日　鈴鹿
は宿さまふ　ぢちのえいめの日　河
用は宿のふ
つちのとのいの日　名張は宿さまふ
のくのの日　やまとの京はいるまして
鳴宮りおちまふそらのとのうの
日　鳴宮より岡本宮はうつるまふ
こと　宮室を岡本の宮のみるを
はつくるまふそしもちる冬こる

うりをたまふ　是を飛鳥浄御
原宮とまふ
冬十一月　つちのえ子の朔のとのい
の日　新羅の客金押実は位くは
饗さまふ　その日　禄おのく
差あり
十二月　ぢちのえ丑の朔のとのと
の日　諸有功勲者を冠位
をまふ　位は小上位より以上をる

まうおの〳〵羌あるうつのくさる
日和一隻新羅の客よりうる
のちひさの日金押寺すう
大いし葉章那乙高見



国立公文書館
National Archives of Japan